

第三章 ニューイングランド聖職者の地震説教

はじめに

第一節 大地震の様相と特別聖儀の敢行

第二節 神の御業としての地震

第三節 背徳への鉄槌と改悛への督励

第四節 地震の自然学的成因

第五節 神の鉄槌 歴史と救済

はじめに

新大陸ニューイングランドにおける地震はジャマイカやリマの大地震と異なり、被害の規模は比較的軽小であるが、住民の恐怖と不安はとりわけ甚大であった。この精神状況を如実に伝えるのは、当地の聖職者による多数の震災史料である。アメリカの研究者ウイリアム・アンドルーズによれば、地震発生から翌年末までにポストンで刊行された説教記録は二四件に及ぶ。これらの執筆者はいずれも著名人であって、多少とも自然学の素養をも有する。各説教の内容はキリスト教的な世界観を基盤として、地震の神学的成因、地震発生 of 規模と震災の様相、摂理による劫罰と罪過の改悛などにわたる。これらの多くは以後冊子として刊行され、いまはエヴァンス初期アメリカ出版集成としてライン利用も可能である。^①

十九世紀末に上梓されたデロス・ラヴ著『ニューイングランドにおける断食と神恩感謝の日』では、新大陸住民を襲った幾多の災害が追跡され、神による警告さらには劫罰としてそれらに対処するピューリタンの行事が追跡された。一六四〇年から一六七〇年にかけて彼らを苦しめたのは、干魘や洪水や凶作であり、さらにはさまざまな疫病である。たとえば、植民地プライマウスにおいて百日咳が蔓延し、一六四九年十一月五日断食が行われ

^① William D. Annwys, *The Literature of the 1727 New England Earthquake. Early American Literature*, Vol.7,

た。① 各地の教会史料を分析しつつ、ラヴは一七二七年大地震に際する聖儀と説教の概要を考証する。

ラヴ著『ニューイングランドにおける断食と神恩感謝の日』

震動が始まるや、目覚めた住民は街路へ逃げ出し、行く場もなく、慄然と群れをなした。最期のときと覚悟した者もある。最初の衝撃が消えぬ間夜明けまでに四、五回は揺れた。つぎの十日間に三十回揺れ、以後も数週異変が続いて、ほぼ鎮まったのは翌年一月三十日の大きな震動による。地震の続発は人心に深刻な影響を与え、改心を求めて神から授けられた苦難として、聖職者が効果的に説教するに至る。大地震の夜明けには、人々は街路にあふれ、みなが恐怖の体験を語り合った。聖職者はこれを好機としたのである。多年にわたり馬耳東風であったニューイングランドに、神から然るべき裁きを賜ったではないか。コットン・マザーがまず最初に行動した。昼前の十時にオールド・ノース教会の鐘が鳴り、「特別の儀式のため」住民を召集した。ボストンで彼の教会が最大の収容を誇り、それもすぐに一杯となった。他の教役者も駆け参じる。それほど厳肅で緊張した会衆は多年にわたり見られない。教役者がひとりずつ祈捧を捧げ、悔悟の心情から流露する真摯な言葉に信者たちは涙した。安易に考えれば、神恩感謝の儀式で済ませたであろう。しかし、安息日の無視、冒瀆、酩酊、あらゆる種類の不正に対する警告を、これまで彼らは再三受け、知らぬ顔を続けてきた。いまや一夜の戦慄で公衆の良心が覚醒したのである。改悛の情が嗚咽の波へと進んだ。〔中略〕

① W. DeLoss Love, *The Fast and Thanksgiving Days of New England*, Boston, 1895, pp.177-180, 183-188.

この聖儀は午後二時まで営まれた。総督代理のグマーもそこに臨席し、ノース教会で礼拝をさらに五時まで引き継ぐよう促す。他方サウス教会には別の会衆が集まり、そこでは八時まで祈捧がなされた。いずれの教会も膨大な会衆で溢れ、教役者のトーマス・フォクスクロフトとジョセフ・スヴァルが『詩編』第四章の四に基づいて説教した。

当然ながら十月三十日は事実上もつとも厳肅な断食日となった。他の地域、ハバーヒルでも同様である。とはいえ、これは最初にすぎぬ。総督代理の勧告によって十一月二日火曜はボストンだけでなく、チャールズストン、マーブルヘッド、ブラッドヘッドでも教会の断食日となった。ついで水曜にブルックリン、ハバーヒル、インスヴッチ、金曜にケンブリッジ、ロクスビュリー、ニュートン、アンドヴァー、ウエイマウスと続く。さらに十一月七日ドルヘスターへ、同月十六日ハンプトン、レイ、その他ハンブシャー諸都市へ公式に断食日の指定がなされた。また、十一月二日コネティカットで、同月九日マサチューセッツにおいて神恩感謝日にも定められた。〔中略〕地震の衝撃に慄然とした住民は、こうして数カ月深い宗教的雰囲気に入れ、聖職者の厳肅な教えに耳傾けた。①

① Love, *op.cit.*, pp.289-292

第一節 大地震の様相と特別聖儀の敢行

さきに述べたロンドン王立協会への寄稿とともに、これら教会の史料はニューイングランド大地震の規模や様相を伝える貴重な証言である。この見地からまず注目されるのは、コットン・マザー編の冊子『地震に関する釈異変聖朝の説教を含む』であって、前文において地震の様相と避難の模様が簡潔かつ明快に語られる。

コットン・マザー編『救世主の鉄槌』その一

コットン・マザー編『救世主の鉄槌 一七二七年十月二十九日・三〇日の夜ニューイングランドを襲った地震の記録（稀有なる大地震の聖朝参集した住民に向けた特別礼拝での説教を含む。）』

序文 地震に関する釈解

一七二七年十月二十九日から三〇日へかけてニューイングランドは、無風快晴に恵まれ、かつてなきまでの静穏な好天となった。しかし、午後十一時約十五分前ボストンでは都市の一端から他の一端へ石畳の上を非常な速度で走る多数の馬車のごとく、凄まじい噪音が響き渡った。これに伴って世にも怖ろしい地震が勃発して、建物を揺るがし、屋内や戸外のさまざまな設備や事物を横転させた。だれもが予期せぬ異変であって、多くの住民が仰天する。最初の震動がもっとも強烈であって、若干の間隔を扶む数次の余震にはやはり噪音

が伴った。余震の総数は不確かであるが、最小限四、五回は確認できる。最後の揺れは午前の五時から六時の間であった。

この地震がどれほどの地域にわたるか、いまだ不明であるが、確かな情報によれば、数十マイルに及ぶ。地震の脅威に加えて、大気には怖るべき火焰と閃光が併発した。沿岸の船舶もこの震動で揺れた。

驚倒した住民が翌朝辛うじて戸外へ出ると、オールド・ノース教会の牧師たちは鐘を打ち鳴らし、可能なかぎりただちに定例の礼拝に参集するよう促した。これらの牧師は住民とともに神に祈り、危機への天佑を懇願した。他の地域からも牧師が迅速かつ自発的に加わり、きわめて周到に協力する。集会への参加者は多数に及び、教会のもっとも広大な会場にも溢れる。真摯なる信者の衆会であって、きわめて敬虔なる全員が神への献身を誓い合った。

オールド・ノース教会での礼拝は午後二時頃に終了し、その一、二時間後他の地域でもいくつかの教会がその例に倣って沢山の会衆を集め、特別の宗教行事が夕宵八時頃まで続いた。これを盛大にしたのは、聖職者と住民の一致した熱意だけでなく、光栄にも総督閣下の推挙である。つねに敬虔であられる閣下は、今次礼拝を翌木曜日（各週講読の予定日）も続けるよう導かれ、当日をボストン全教会の祈願日と定められた。

一五八〇年イギリスで地震が発生し、大きな被害はなかったが、王権は即刻熱烈な祈禱を捧げ、地震の微候たる神の怒りを和らげるよう命じた。我らの指導者もそうした施策に立ち、民草も躊躇なくそれに従う。

朝の大集会において教役者のひとり、祈りとともに誓いを捧げるのが至当と判断した。さまざまな時宜に適切な誓いを選んできた彼は、いまだ消えやらぬこの危機、大地震に際し崇高なる神の明快な声を伝えた

のである。①

ニューイングランドでもっとも著名な聖職者のひとりコットン・マザーは、一六六三年ハーヴァード大学学長インクリーズ・マザーの長男としてボストンで出生した。年少にしてラテン語やヘブライ語に親しんだ彼は、十五歳でハーバード大学を卒業し、二五歳のときオールド・ノース教会の教役者に推挙された。以後終生そこで説教を続ける一方、祖父および父と同じくマサチューセッツの神権政治に深く関与する。また、文筆家として多数の著述を残し、とくに列伝的な大作『アメリカにおけるキリストの大きいなる御業』は、初期アメリカ文学を代表するひとつと評価される。また、ベンジャミン・フランクリンはマザー著『善行論』を愛読し、その成果を小品「貧しいリチャードの暦」に撰取した。ちなみにフランクリンは一七二七年大地震の際二一歳の青年であり、ロンドンから帰国して、ボストンで印刷業を再開したばかりであった。なお、コットンは父インクリースとともに有名なセイラム魔女裁判を進めたため、今日ともすれば否定的評価を付せられるが、ニューイングランドにおける宗教と文学の分野で指導的役割を果たしたことは確かである。

マザーによるこの記録は、後日刊行された説教の序文として記述され、以後地震発生の際の証言としてしばしば引用される。この史料でとくに注目されるのは、震動に伴う噪音の記録であり、さらには被災者の精神的衝撃と教

① Cotton Mather. *The Terror of the Lord. Some account of the earthquake that shook New-England, in the night, between the 29 and the 30 of October. 1727.* pp.1-3. *Evans Early American Imprint Collection, on-line.*

会における応急の対応であろう。オールド・ノース教会の中核である彼も地震発生時点では、高齢であり、演壇での教導は短簡であつたろう。後日刊行された記録の本編では、他の教役者による長文の説教が収録される。一七二七年の説教は異変の直後被災者みずからを会衆とするものであり、いま実感した地震の様相をその席であらためて説明する必要はなかった。マザーによる証言が序文として誌されたのと同じく、つぎの記録も説教集の序文および補遺として伝えられる。その執筆者はおなじくオールド・ノース教会の教役者トーマス・プリンス神父であつて、説教自体は震災第五日の十一月二日、断食と神恩感謝の日としてサウス教会において行われた。

プリンスの説教『神の御業にして聖なる怒りの顕示』その一

序 文

十月二九日主の祭日である晴朗で静穏な夜十時四十分頃に都市ボストンは、未曾有の激烈な地震に突如襲われた。それに伴って煙突の猛火のごとき爆音が、凄まじく響き渡る。三十秒後大地が隆起し、動揺する。約一分震動はさらに強まり、とりわけ上階の家具、戸口、窓、壁が異常に軋り、家屋自体もぐらついて解体・倒壊するかに思われた。寝入りかけた住民は仰天して目覚め、他の多くも驚愕して街路へ逃れる。しかし、まもなく震動は鎮まり、三十秒後まったく止まった。

震動と轟音は北西の方向から来て、南東の方向へ去った。建物の揺れを感じ、脆い家具が壊れ、煙突先端の煉瓦も落下した。しかし、破壊された家屋はなく、傷ついた生きものもない。陽が昇るまでに遠くから

数度噪音が聞こえ、弱い揺れを感じられた。しかし、当地で地震が鎮まっただけから、当然人心はいつまでも深い不安に包まれた。

十一月十一日の朝かくも異常な事態への勤行としてノース教会で統一大祈祷会が催された。五日夕宵にはオールド・ノース教会とサウス教会で同じ趣旨の集会が企画され、いずれにも非常に多くの人々が参集した。また、総督の提議により同じ週の火曜日（十一月二日）が、ボストンの全教会で特別の断食と祈祷を行う日と定められた。

一七二七年十一月二十日 トーマス・プリンス ①

補 遺

この大地震は周辺の島々を含め、大陸全土にわたり、南はペンシルベニアのドラヴァーレ河から東はカスコ湾先のケンベックに達して、約五百マイルの範囲に及ぶ。そこには沿岸部だけでなく、軽度の地域もあるが、内陸部のイギリス植民地も含まれる。震動の経路はおおむね西北西と東南東であった。ボストンに較べ、西方の地域では数分早く、また東方の地域では数分遅く震動が感じられた。

フィラデルフィアではひとたび揺れたが、強くはなかつたと記録される。ニューヨークとロングアイランド

① Thomas Prince, *Earthquakes the Works of God and tokens of his just Displeasure*. Boston, 1727. pp.1-3.

Evans Early American Imprint Collection. online.

では二度揺れ、ボストンとおなじくあとの震動がより強烈であった。コネティカット州のスタンフォードとギルフォードにおいて十時から数分後に地震を感じて、鐘楼も響き、煙突が倒れた。ニューロンドンでは一棟の家屋が二フィートも地滑りした。グートマウスにおいてある教役者は戶外で轟音を聞き、それが北西から南東へ急速に移るのを感じた。ドルチェスターでも凄まじい轟音が響き、遠出していた数名はブルー・マウンテンの山崩れに発すると推論した。マーブルヘッド港からカスコ湾に向けて出航した船団は、最初の強い衝撃で小さな暗礁に阻まれたように感じ、海流の異変で船体の方向を変えた。なお、これらの地域では以後九日か十日の間に噪音がほぼ三十回発生する。

とはいえ、メリマック河畔の町々は一層深刻な様相を呈した。ハンプトンではまず噪音を聞き、閃光が窓辺に射し、地面を照らすや、震動は始まった。田野の獣類が驚愕して吼え走る。これまで凍ったこともない泉で、異常にも湯が沸き上がる。泉全体も深く沈下しており、元の高さへ戻すため、掘り上げる必要があった。やや寒くなった現在、そこには氷が張る。

ニューベリにおいていくつかの地下室で壁が崩れる。一階の炉床がひとりの住民もろとも地下室へ落下した。また、三カ所で地割れが発生して、多量の土砂を噴出した。そのためある地点では土硫黄の灰に似た微細な砂が、荷車十六ないし二十台分も発散したとされる。ブラッドフォードでは深さ六フィートの井戸ふたつが、地震によって干上がり、泉もいくつかが陥没した。

アンドヴァアの道路でも地面が隆起した。乾燥した土壌の地区が湿地帯となり、泥沼と化した道路の通行は危険となった。

両側の河岸に位置する町々では無数の障壁が倒れ、煙突の先端もいくつかが墜落する。煉瓦造りの建物も多

数粉砕された。恐ろしい噪音が聞こえず、家屋が軋り揺れぬ日は、以後ほとんど一日もない

ボストン、一七二七年十一月三十日 ①

プリンスによる説教序文には、地震の強さと破壊の激しさとともに、震動と噪音の様相が的確に記録される。また、補遺として綴られたニューイングランド各地の被災状況は詳細で広域にわたり、貴重な史料に数えられる。一六八七年マサチューセッツで生まれたトーマス・プリンスは、ハーバード大学を卒業したのち、西インド諸島、マデイラ諸島を旅行し、さらにイギリスで移民の史料を収集した。やがて帰国した彼は、一七一八年マザーと同じくオールド・ノース教会の教役者へ選ばれ、終生その地位を占める。大地震の翌年着手し、十年を費やした大作『ニューイングランドの年代記的歴史』が彼の代表作とされる。②

第二節 神の御業としての地震

宗教改革の指導者ジャン・カルヴァンはフランスにおけるユグノー迫害を逃れ、ジュネーヴで神権政治を成就して、その著作はピューリタン間で広く読まれた。神が宇宙を創造し、万物を統御するとの信仰を、彼はつ

① Prince, *op.cit.*, pp.33-35.

② Thomas Prince (historian). Wikipedia. online.

ぎのように説く。「世界は最初神に創られたように、神をとおり現在の状態に維持される。かくして天も地も、あらゆる被造物は神の力なしには存在しえない。なおまた、その御手には万物が抱かれ、当然それらを支配し統御される。それゆえ、天と地の創造者は、正義と力と英知により自然のあらゆる秩序を導き給う。すなわち、雨や乾きを、雹や嵐や晴天を起され、ときには豊饒へ、ときには不作へ、またしばしば健康を、しばしば病患を与え給う。」①

一七二七年ピューリタン聖職者の説教は、こうした神学的な世界観を基調とし、地震の成因、地震による警告、罪過と改悛、劫罰の事例、さらには自然学的観察などの諸項目よりおおむね構成されるが、各々の力点や精粗に関して微妙に相違する。ここではまず地震の成因説明、すなわち地震が神の御業にして劫罰であるとの立論をめぐり、大地震の三日後ブルックリンでなされた教役者アリンの細説を検討したい。

アリンの説教『雷鳴と地震』その一

ブルックリン福音教会教役者ジェイムズ・アリン 「雷鳴と地震 改悛への畏怖すべき歴然たる摂理」

① Jean Calin, *Catechisme de l'Église de Genève, Genève, 1853*, p.9.

〔参照〕ジャン・カルヴァン著、外山八郎訳『ジュネーヴ教会信仰問答』新教出版社、一九六三年
十六ー十七頁。

『イザヤ書』第二十九章六

(ダビデが宮を構えた都よ) 万軍の主エホバは雷、地震、轟音、旋風、暴風および猛火をもって臨まれる。

右記の章句をよめば、この晩夏私どもに向けられた畏怖すべき摂理、なかでも主の斎日夕宵に数次発生した地震を無論ただちに思い浮かべるであろう。

全能なる神が正義を啓示されるため、脅威を敷かれたのである。主の強大さが示されたいま、私どもはみずからを猛省し、生きものすべての総力をも超える神業を畏怖し、奉祀せねばならぬ。

かかる摂理を意に介せず、無視するならば、主の激怒を招き、『詩編』第二十八章五で唱われる破滅的審判に曝されるであろう。すなわち、「彼らは主のもろもろのみわざと、み手のわざとを顧みないゆえに、主は彼らを倒して、再び建てられることはない。」ここに参集した皆様すべてが、かかる叱責と恐怖を免れるべく、このたび明示された異常な御業を深刻に受け止めるよう切望する。摂理への畏怖が私どもの心に刻まれることを、主が永遠に記憶されるよう願うとともに、地震当夜の動転、これが破滅の淵と観念し、最期の際と感じた衝撃がいつまでも消えぬこと、まただれもがかつての罪深き人生に戻らず、以前と同等か、一層哀れな人間とならぬよう望む。

予言者イザヤがアリエル(エルサレム)について予言した怖るべき審判は、比喻に止まらず、近々わが国にも下され、だれもが改悛と革新に目覚め、過去の罪過を悔い改め、未来の不品行を防ぐべきである。悪業の極みから逃れ、

世塵を免れて神の前にひれ伏すがよい。かくして摂理に沿う帰結であって、私どもの救いとなる。

しかし、全能の神を無視して罪過を続け、苦しみも悩みも悲しみもなしに再三警告に従わぬならば、私どもも粗末な塵埃に変えられ、王都エルサレム、神の民が住むアリエルにおけると同様、この世から消え去るであろう。激しい不興にあられても、神は救いの手を伸べられる。それゆえ、悔悟する民をおそらく神は罪人とはみなされぬ。罪が深ければふかいほど、その悔恨も深刻なはずである。救世主を仰ぐアリエルの信仰は当地の荣誉と安寧へと繋がり、この地を侵略する軍勢は風前の灯火に等しい。だが、神の愛顧と守護を失えば、あらゆる種類の災厄を招く。①

この説教においてアリンはまず『イザヤ書』を引証し、地震が神意により惹起され、罪深き民への警告であると論じる。この経典は『イザヤ書』は『旧約聖書』三大預言書のひとつとされ、人間の傲慢に対する神の裁きが主題である。イスラエルの地、ユダ王国において偶像崇拜へ傾き、他民族に屈従する王都エルサレム、別名アリエルへエホバの神は、劫罰として戦乱と地震を呼び起した。説教における典拠引用はおおむね短簡であるため、

① James Allin, *Tender and Earthquake: A Loud and Awful Call to Reformation*, pp.1-3. Evans Early American

あらためて欽定聖書『イザヤ書』を参照する。因みに欽定聖書は一六一一年ジェームズ二世の命により英文で大成され、ニューイングランドでも広く用いられた。「ああアリエルよ、アリエルよ！ああダビデの宮を構えた都よ！年に年を加へ、季節まはり来れば、われアリエルを悩まし、これを悲しみと嘆きで包もう。われ汝らのまはり営を構へ、砦を築きて囲み、櫓を建てて攻めよう。かくて汝らは低く屈せられ、地に伏して物言ひ、塵のなかより低き声出して語る。汝らの声は地の霊のように聞こえ、汝らの言葉が塵のなかよりさえざる。なおまた、汝らの外敵は砂嵐のごとく突如襲おう。このとき万軍の主エホバ、雷鳴とともに急遽臨まれ、地震、轟音、疾風、暴風、さらには燃えさかる火焰をもって戦い給う。アリエルに敵対するすべての民族、国土と軍備を攻撃して汝らを困窮させる勢力も、かくして夜の幻のごとく消える。』『イザヤ書』第二十九章一―八。① そして、ダビデ王の治世に隆盛に達し、ユダ王国の首都として継承されたアリエル、すなわちエルサレムにおいて豪奢と背徳が蔓延することを、預言者イザヤは痛嘆する。「彼らの国には金銀が充ち、財宝の数は限りない。彼らの国には馬が溢れ、戦車も数限りがない。彼ら国では偶像が満ち、各自の手指で製作したものを崇拜する。また、下層の者が蔑視され、立派な人物も屈辱を受ける。これを許してはならぬ。主エホバの御姿と栄光が現れるとき、これを畏れて汝らは岩間に入り、砂塵に土にかくれよ。この日彼らの慢心は挫かれ、彼らの尊大も倒されて、エホバのみ高く輝く。」②

① The Book of the Prophet Isaiah, *The Holy Bible (King James Version)*, London, 1611. Oxford-reprint p.743.

② *Ibid.*, pp.722-723.

ニューイングランド地震に際する幾多の地震説教は、イギリスの教役者トマス・ドーリッテルから影響を受けたとされる。一六九二年ロンドンを始め各地で地震が発生し、その翌年ピューリタンたる彼は『地震の解明と改悛の実践』を執筆した。① 「悪疫と大火と地震は」とその冒頭で彼は述べる。「偉大にして崇高なる神が、断罪されるもつとも畏怖すべき裁きであって、主が罪深き民に不興を抱かれ、唾棄すべき邪悪な過ちを怒り嫌われるからである。これら三種の裁きがロンドンに下された。第一の一六六五年における死の疫病である。第二は一六六六年の大火にほかならぬ。そして、最後がこれなる一六九二年の地震である。」これらを司るのは、神に統御される宇宙の理法にほかならぬ。「ときには我らの頭上なる天上において、ときには我らの脚下なる地底において神の創造は驚異的であって、すべての民が完璧なる御業に驚嘆するばかりである。」太陽が動き沈むのも聖なる摂理により「さらに地球をも統御して、地を動かし、揺がし給う。」さらにドーリッテルは、『聖書』を引用し、地震が罪深き民への劫罰であると説いた。「地震ないし大地の変動は、諸国や国家や教会への大いなる衝撃あるいは警告、邪悪にして従わぬ輩への天罰と、ときには形而上学的に解釈される。〈万軍のエホバ彼らに臨み給う。雷と地震と大いなる音響と、暴風と旋風と焼きつくす火焰とをもて〉『イザヤ書』第二十九章六。これこそイスラエルへ向けた神の怒りが象徴的に表現されたものであって、この国を破壊させるべく、天と地の参戦まで悟らせる。」「人々が結合し統治される共同体がこうした地震によって、破壊され転変し、村落のごとく一変

① Maxine Van de Weert, *Moraling in Puritan Natural Science : Mysteriousness in Earthquake Sermons. Journal of*

する。強固な城砦と信じた諸州や王国が、田舎小屋のごとき住処に変わるのである。」①

アリンの説教『雷鳴と地震』その二

地震が意志なき偶事に起因するとの理論、またはそれが神聖な統御に欠ける自然学的要因から起こるとの推論は、不合理で無神論的である。神は世界をなんら支配せず、統御の方策たる賞罰もありえず、主の力能と裁きがきわめて厳肅かつ歴然と發揮される事例も認めえないと、この推論では主張される。

恵み深き救世主は人生のもっとも些細で日常的な事柄においても神と摂理を認識するよう導いた。都市や一国に悪業が拡がる時も、これを阻止する主の御業と見なさねばならぬ。

ある種の地震は神から直接に発し、他種の地震は二次的成因の作用で起きる。福音書では双方が区別なく神の御業と記述されが、ここに敷衍してみよう。

一、しばしば地震は洪業として神から直接生じ、自然の経路と度量を超えて発現する。これなる作用によって副次的な条件が発動し、摂理に添う革新に寄与するのである。

かくして立法者モーゼが山岳に到り、律法を定めたとき、シナイ半島で起きた地震は超自然の洪業であった。それは奇蹟の日であり、その壮大さと厳肅さにおいてすべてが類稀であった。『出エジプト記』第一

① Thomas Doolittle, *Earthquakes Explained on practically Improved*, London, 1683, preface, pp. 2, 7. 28-30.

九章)『詩編』第一一四章でも畏怖すべき出来事が詠われる。「イスラエルの民がエジプトを去るとき、海は退き、ヨルダン川は逆流し、山は牡羊のように、丘は子羊のように動いた。海よ、なぜ逃げるのか。」この問いこそ奇蹟が実在し、なんら自然的現象でないことを伝える。激しい地震によって使徒パウロとシラスが獄舎から脱出し、獄吏を改宗させた史実も、勿論異常な出来事であって、使命を達成すべく神より発したものである。『使徒行伝』第十六章)救世主の死と復活に際して起きた数次の地震が、奇蹟に属することを否定する者はいない。『マタイ伝』第七章および第二十八章)そうした時点における日食も自然現象ではありえない。慄然たる事実に対する神の怒りを示し、かくも無惨に扱われた人物が、人間を超える存在であることを、愚かな民に教えるためである。

ユダの王ウジヤが神殿へ侵入したとき、エルサレムで起きた地震も神直々の審判であった。『アモス書』第一章)ヨセフスによれば、香を供える最中に寺院が破壊され、亀裂を陽光が照らし、ウジヤ王の身体全体にハンセン病が拡がった。それとともに山岳の片側が破壊され、王宮の庭へと崩れ落ちた。『歴代志下』(第二章)神はときに地震をもって民に警告や劫罰を与えると、以上の史実から推論できよう。

二、地震は副次的成因によっても惹き起こされる。地球の偉大な創造者は永遠なる構想を各部分へ恵み深く分与され、天上の基本的世界にはそれを推進する徳義と能力を授けられた。かく定められた自然の法則を逐一指図するわけではないが、神はつねに支配される。それゆえ大地の果実を太陽と月の作用に産出せしめる。かくして神は昼と夜を適切にも交互に切り替えさせ、黄道帯の各地点を太陽に通過させて四季を実現する。

とはいえ、地震の自然的成因については最高の英知と洞察を有する人物も、なお推測するのみである。

これについてはさまざまな憶測が乱立し、甲論乙駁を繰り返すにすぎぬ。

古代の異教徒は地中の空洞における水の変動を地震の成因と信じ、それを司る海神ネプチューンを祀った。これにはなんら確固たる根拠がない。

風が大地の内部に閉じ込められ、出口を求めて激烈に発散し、地震に至る、と論じる人たちもいる。これへの反論も容易であろう。風が迅速に地中を通過し、数分にして五百マイル先の地を揺がす自然現象はまったくありえない。なぜなら、きわめて強い突風よりも急速に大気を貫く大砲の発射すら、一分間に一リグルスしか飛ばぬからである。この算定によれば五百マイル先へ到るには、ほぼ三時間を要すが、今次震動を感じた時差は、フィラデルフィアとアロヴシックとの間で一時間余りであった。

真理にもっとも近いと私が思う理論は以下のごとくである。大地において硫黄、硝石、胆礬たんぼんなど可燃性物質の燃焼で生じる地中の火焰こそかかる驚異の成因にほかならぬ。この火焰は電光と同じ物質から成り、電光と同じく信じられぬ速度で飛ぶとともに、抗し難い力を備え、このたび私どもを襲ったとおり大地の激烈な衝撃を与える。この理論によって問題が解決するか否か、ここでは敢えて語らず、それを探究する任務を然るべき方々に委ねたいと思う。

しかしながら、かくして自然的成因を受け入れたとしても、すべては神の手中に存し、終始神の意志に従っている。神がそれらの統御を放棄され、自力での作用を許されると考えてはならぬ！それによって世界が野蛮な無秩序と混乱に覆われてよいのか。否！神は自然に教示と指導を授け、制約と限界を課して、聖なる構想に加わり、その完遂に寄与する自由のみを与える。したがって、私どもが享受する善も、私どもを苦しめる悪も、すべては神に帰せられる。主こそあらゆる自然現象を真に統御するのでなければ、聖なる審判に

寛恕を乞い、聖なる祝福を祈念する根拠がどこに存するであろうか。また、私どもがさまざまな危険から守護され、みずからの利益となるあらゆる事柄をなし得るよう主に頼る根拠がどこにあるか。それゆえ、一切の事象を自然的成因に帰するのは神への冒瀆であって、この世から宗教の一切を抹消する直接の方途、それに固執するなにも免れぬ致命的結末にほかならぬ。かかる原理が真であるならば、主の約束は欺瞞と妄想にすぎず、脅威を数くとの滑稽な警告も顧慮するに値しない。かかる主張に捉えられた人々にとって、神による約束の履行や脅威の完遂など笑止の沙汰であり、果しえない営為である。①

コットン・マザーの父インクリース・マザーは、一六六四年から約六十年間オールド・ノース教会教役者の職務にあり、ハーバード大学の学長をも兼ねて、宗教界の指導的地位にあった。一七〇五年の六月十六日と二二日ニューイングランドにおいて四三年ぶりに相当の地震が発生する。イギリスの聖職者ドーリットルの業績をかねてポストンで紹介する彼は、このときみずからも「ニューイングランドで発生する地震」と題して説教した。②

教役者アリンのそれをはじめ、二二年後になされたあまた地震説教の原型が、ここに見出される。『新約聖書ルカ伝』第二章の言葉「各地に大地震、飢饉、疫病来らむ。また、そこに怖るべき異変と偉大なる啓示現わる。」

① Allin, *Thunder and Earthquake*, pp.17-22.

② Cotton Mather, *The Terror of the Lord*, Appendix, p.4.

これを巻頭に掲げて一七〇五年にインクリースは立論する。「地震は神の御業である。神の摂理なしにはなにも生じえない。キリストは使徒に申された。〈神の心なしには、一羽の雀も地に墜ちることなし〉『マタイ伝』第十章二九。されば地震ほど巨大な事柄は摂理なしに起こりえぬ、と我らは確信する。大地はみづから震動できない。全人類の力をもつてしても、地震を発生させるのは不可能である。だが、地球を創造された神は、いかなるところいかなるときでも大地を震動させ給う。〈神その地を震わせば、柱揺らぐ。〉『ヨブ記』第九章六。」インクリースによれば、こうした地震の発生は人間に対する聖なる警告にはかならぬ。「総じて地震は人間が罪を犯し、神が怒り給う証左である。罪を犯さなければ、人間が地震に襲われることはないであろう。したがって、世の掟を神が禁じられるとき、地震が発生した。法を逸脱する人々へ神が激怒されるのである。〈山々揺らぎ、峰々崩れる。地噴き上がる。たれかその怒りに耐えうらむ。〉『ナホム書』第一章五および六。」^①

アリンの地震説教には自然的成因への言及も含まれるが、これを超越的な根源に発する付随的現象とみなす基本は他のビュリタン聖職者と同様である。自然学的考察についてインクリース・マザーの説教はむしろ稀薄であるが、先駆とも言えるドーリッテルは、古代以降の地震理論を詳しく点検した。「地震の実体を」とその著『地震の解明と改悛の実践』に誌される。「自然的なもの」と超自然的なものに区別する必要がある。地球自体は静止と不変を本性とし、すべては神の手から直接導かれるが、自然における第二の成因としてときには大地に揺れや

^① Increase Mather, *A Discourse concerning Earthquakes, Occasioned by the earthquakes which were in New-England.*

Boston, 1706, pp.3, 5, 11. Evans Early American Imprint Collection. online.

震動が発生する。こうした地震の成因について自然哲学がなした諸説を手短かに説明しよう。」こうしてドーリッテルはセネカやアリストテレスについて述べたあと、十七世紀フランスの自然学者ジャック・ロオーの理論を開陳する。「リオーは『自然学』第三部においてつぎのように論じる。もしも地下の空間あいには空洞に膨大な蒸気が充満すれば、新しいロウソクが不意に点火されると同じく、それ自体の拡大と膨張によって上方の地面を押し上げるであろう。あたかも埋められた火薬が、地面を突き上げ、爆発が終わるや、隆起した部分が本来の重みによって当然落下するのである。大地の震動はまさしくここに発する。多くの空洞が近くに伏在したり、相互に何らかの連関があつて、そこに蒸気が充満し、点火に至れば、多数の震動が相繼いで起きるであろう。」^①

第三節 背徳への鉄槌と改悛への督励

一六三〇年六月リンカンシャー地方の非服従派ビュリタンは、ジョン・ウインスロップを指導者とし、ニューイングランドのセイラムへ出航した。モーゼに率られたイスラエルの民がエジプトでの苦難から脱し、神に約束された地、乳と蜜の流れるカナンで理想郷を築いた故事に倣ったのである。大西洋横断の船上でウインスロップは六月十二日名高い説教「キリスト教慈愛の模範」を行った。「この壮途にあたり我らは」と彼は一行の決意

^① Doollitel, *op. cit.*, pp.26-27, 53-54.

を表明する。「神に誓約を捧げた。神が我らに委託されたのである。主の導きによって我らは盟約を結び、その厳守を誓い合つて、聖なる愛顧と祝福を祈つた。主がこれを喜悅され、約束の地に無事送り給うならば、我らは誓約の確認と委託への感謝を奏上し、これに基づく盟約の遵守に努める覚悟である。とはいえ、それらの履行を等閑にして、当初の目的に背くならば、また神を欺いて現世に執着し、官能的な営みに耽り、己れと子孫の繁栄のみを求めるならば、かならず主は我らを激怒されて罪深き民へ復讐され、誓約の背離に鉄槌を下されるであろう。こうした破滅を回避し、子孫を護れる方途は、予言者ミカが教えるように、正義を貫き、慈悲を尚び、神とともに謙虚に歩むほかない。それゆえ私どもはこれなる壮挙のため一体となつて団結すべきである。各々は兄弟の愛情をもつて扶助し、他者の必要を充たすべく、己れの余力を快く割かねばならぬ。柔和、親切、忍耐、寛容の精神により相互の緊密な関係を維持すべきであろう。また、他者の喜びをわが喜びとし、他者の苦況をわが苦況として、ともに楽しみ、ともに嘆き、ともに労苦しつ、成因たる共同体とその使命をたえず念頭に浮かべるべきである。」こうしてウインスロブはプロテスタントの信仰に基づき、正義と博愛を原理として模範的な植民地を建設するよう提起する。「神が我らに称讃と榮譽を授けられ、今後植民地開拓を志す人たちが、〈主よ、ニューイングランドにされたごとく導き給え!〉と祈ることを願う。なぜなら、我らは丘の上の街を築かねばならむ。あらゆる民族の目が我らに注がれる。船出したこの壮挙で主への誓約を偽り、神護が中止されれば、我らは全世界から嘲笑される。」船上におけるこの歴史的な説教は、『旧約聖書 申命記』第三十章におけるモーゼへの言葉によって閉じる。「〈神エホバ往きて得るところの地にて汝らを祝福し給うべし。されどもし心を翻して

聴き従わず、誘われて他の神々を拝み仕えれば、汝らはかならず滅びむ。〉①

ピューリタンの理想を実現すべく、ウインスロップらによつて神権政治が敷かれて約百年後、ニューイングランドで大規模な大地震が発生した。コットン・マザーの主導で急拠営まれた説教は、その精神的衝撃から語られる。

コットン・マザー編『救世主の鉄槌』その二

地震の翌朝、一七二七年十月三十日教役者のひとりによりなされた説教

莊嚴なる神がシオンの山より大喝し給うた。私どもも昨夜怖るべき大喝を聞いた。だれもが慄然としてまじく二度響くのを聞いた。脚下の大地が揺れ動き、神の声で私の唇は震え、受難の日と悟つて動転する。いずこに居ますか、主を畏れて身も縮み、聖なる審判に恐怖した。獅子が吼え、これを恐れぬ者があるか。戦慄せぬ者は禽獣にも劣る。

数時間前に体験したこの夜ほど凄絶な夜は、九十年來都市ボストンではなかった。深夜を悲鳴が貫き、驚愕は朝に至るも止まぬ。あるいは男たちに、あるいは女たちに背負われて寐する病女のごとき苦悶である。

怖るべき地震は三度以上繰り返した。さらにいくたび襲うか、いつ裁きがなされるかは、神のみぞ知り給う。

マサチューセッツで理想郷の建設が開始された一六三〇年、四千六百であったニューイングランドの人口は、一七〇〇年に二五万一千、一七二〇年には四六万六千と激増する。なかでも、ボストンはヨーロッパ等からの主要な輸入港であるとともに、早くから食品や衣料の生産が開発される。① プロテスタントイズムが勤労の意欲と資本の蓄積を促進したのは事実であろうが、こうした産業の発展と消費の拡大が、禁欲的な倫理を弛緩させたことも確かと思われる。

大地震の勃発にいち早く危機管理を主導したコットンは、かねてこの地における信仰心の減退と布教活動の不振を慨嘆していた。一七〇二年に完成した代表作『マグナリア・クリスティー・アメリカナーニューイングランド聖職者の歴史』第三巻序文において彼は述べる。「我らの教会に怖るべき頹廢が、急速に浸透したことを余は痛感する。もつとも重要な信仰とともに、もつとも大切な愛の大きな基盤を失う危険、我ら植民地の主たる目的である教会秩序の中核を放棄する危険が増大しつつある。いまだ未開の土地にイギリスから神が運ばれた最初の種子に繁栄と福祉が蔽されたのに、我らあらゆる階層で明らかにそれらは減退した。近年ヨーロッパでジャンセニズムの台頭もあってカトリックが盛り返して、プロテスタントが劣勢にあり、ペラギウス主義やソツツ

① 岡田康男編『アメリカ地域発展史』有斐閣、一九八八年。三六、四三頁。

イーニ主義などの反逆まで許すのも意外ではない。」ピューリタンの理念で築かれたマサチューセッツ草創期を理想とするコットンは、ウインスロップなど開拓者多数の列伝を綴り、彼らの高潔で博愛的な生涯を模範に供した。「ニューイングランドの父祖について虚構も粉飾も交えず伝えるに際し、彼らの生涯を明確に叙述することが、子孫への親愛なる助言として大いに役立つよう余は祈念する。故人の腕に痛烈な一撃こそ、いまや冒された難病への療法なのである。」①

罪深き新大陸住民への鉄槌は、多彩な才能と経歴を有する聖職者ジョン・バーナードによって、一層仔細に説明された。つぎの地震説教は大地震の四日後マサチューセッツ湾の港町マーブルベッドで行われた。この説教は彼の教会記録『若人へのふたつの講話とひとつの説教―一七二七年十月二十九日の地震に際して』に含まれる。

バーナードの説教「神の統御し給う地震」その一

① Cotton Mather, *Magnalia Christi Americana or the ecclesiastical History of New-England*, London, 1702. Book III,

pp.1, 11.

〔参照〕薙澤 梓「ピューリタンの共同体」としての十七世紀ニュー・イングランド社会」新潟大学

人文学部編『人文科学研究』第一一八輯（二〇〇六年）

願わくは我らが衷心より悔悟し、周囲のあらゆる事柄を改めることを！聖なる審判が下された原因はなにか。我らの罪過に神は激怒されたのである。これなる審判に命ぜられるのはなにか。悔悟、悔悟！そなたらすべての悔悟のみである。予言者イザヤがユダヤの民を非難し、神の裁きをつぎのように告げる。（『イザヤ書』第二十七章九）「これによってヤコブの不正は洗い浄められ、実る果実により罪が除かれる」かくも親しく神が我らに裁きを下されたとき、だれもが真にみずからを改悛し、不正が我らの破滅とならぬことを期待されたのである。いまこそ我らすべてが生きかたを変革し、悪しき生活を改めようではないか。畏怖すべき審判の前に立たされるそなたらの顔にこれまでの罪過が刻まれるの自覚し、聖なる報復が頭上に下されぬべく、種々の悪事を身から真摯に払い除けよ。この国で、またこの町でとくに憂慮すべき罪過をいくつかここで率直に挙げてみよう。

第一には、我らの周辺ほど不正との叫びが数多いところがあるか。大抵の人々、高位の聖職者すら世俗的な才覚に染まる現実が明白ではないか。公法に触れぬことなら彼らはなにごともしかねない。己れが肥え太るための掴み取り、横取り、押しつけ、詐欺、詐取、欺し合いである。目方のごまかし、寸法のごまかし、品物のごまかし。ほとんどいつでもどこでも我らの周りには！かくしてだれしも自己の損得だけを案じ、隣人の利益や便宜を考慮せぬ。情けはひとのためならず、との金言に沿うひとは少数が皆無である。遍くこれが現状であるからには、万人が徹底的にまずこれを改めねばならぬ。

第二には、我らの間ほど深酒が蔓延するところがあるか。これこそ神の裁きで厳しく禁じられたもので、深酒によって道を誤る。「その食卓はすべて嘔吐で覆われ、清きところなし」ああ、隠すすべもない。異常なまでの深酒と酒乱が、この国とこの都市で犯される深刻な罪過である。酒房の増大、強い酒の啞然とする消費量、酔漢の千鳥足や戯言、さらには激情による暴力沙汰など目に余る証左は多い。我らがよろめき、千鳥足となるとき、神は大地を揺さぶり、転覆させ給う。みずからの人生と魂を愛するならば、即刻改めるようそなたらに懇請する。

第三には、忌むべき不倫は我らのなかに潜みはしないか。『イザヤ書』第二十九章十五に曰く。「彼ら闇において行なつて言う。だれが我を見、我に気づくか、と。」かかる秘かな不倫は闇のなかで行われる。我ら自身を反省しよう。多くの事例が我らの間で増すばかりではないか。近親相姦はなかつたのか。姦通はどうか。結婚以前に親しくした別の人があるのも、若者にとつて普通ではないか。こうした不倫はこの都市をもこの国をも汚染し、これに赫怒される神は、我らを放逐される。願わくば、摂理による警鐘を心に刻み、かかる仕業がこの地で根絶するように！

最後には、これなる民の公然たる流神についてどうか。『イザヤ書』第二十九章二三ではユダ族に蔓延する邪悪について語られる。「わが名を聖としてヤコブの神を崇敬し、イスラエルの神を怖れよ。」彼らは神の御名を聖とせぬのみならず、それを冒瀆したのである。我らの間で主への呪いや悪口が日常の言葉となり、神の御名をいかに凄まじく汚していることか。主の祭日にすらいかに多くの人たちが、夕べの遊技や慰安において聖なる安息日を冒瀆していることか。確言できる事実を誌そう。主の祭日にあたる先の夕べには、流神の風潮がとくに目立ち、多数の人が自宅でも他所でも罪過に耽り、その最中に神の怖ろしき審判が下され、

彼らと彼らの建物が地震に襲われた。主の祭日における冒瀆はまさに忌まわしい罪過である。そなたらが安息日を敬虔に過ごさぬために、主はその日を夏のごとく暑くし、艱苦を授けられた。このような邪道が反省されて、各自の営為が改革され、だれしも真摯に生きることを、衷心よりそなたらに懇請する。①

指物大工の息子として一六八一年ボストンに生まれたジョン・バーナードは、ニューイングランドにおけるもっとも多才な聖職者のひとりである。言語と数学に秀でた学者、航海と造船の達人であるとともに、文学と音楽にも精通した。また、建築家として目抜きの木造歩道を建造し、ハッチンソン大尉倉庫やピッツ船長喫茶館を建築する。マザー父子の恩顧を受け、コールマン神父と親交ある彼は、マールヘッド教会の教役者として行政的にもマールヘッドの発展に貢献し、貧弱な漁村を繁華な港町へ変貌させた。一七〇七年にはフランス領カナダへの侵攻に従軍司祭として参戦し、この時期カード賭博に耽溺して、マザーの譴責を受けたとされる。②

① John Barnard, *Earthquakes under the Divine Government, a Sermon preached November 2. 1727 at the Lecture*

in Marblehead after terrible Earthquake. . pp.91-94. in Barnard, *Two Discourses addressed to Young Persons* .

To which is added a Seremon occasioned by the Earthquake which was October 29 1727. Boston, 1727.

② Perry Miller and Thomas H. Johnson, *The Puritans, a Sourcebook of their Writings*. New York, 1963. volume I, p.270. Erik R. Seemann, *The Spiritual Labour of John Barnard, an Eighteenth-Century Artisan Construct his Piety.*

Religion and American Culture : a Journal of Interpretation. Vol.5, No 2 (Summer: 1995) pp.181, 207.

複雑な経歴を辿り、多様な分野で活躍するバーナードの説教は、天罰を受ける民の背徳についても綿密で鮮明である。大地震発生の二十日前に行った若者への講話にも、自戒をも思わせる忠告が含まれる。「悪しき交遊への防衛。交遊は楽しく、人間の本性からして、語り合うのは愉快である。快適な社交と会話には独特の魅力があり、我らは話し相手の態度や動作に染まり易い。」だから悪しき仲間との付き合いは若者にとってきわめて危険である。「旧約聖書箴言』第二章二四および二四に誌される。怒れる者と友になるな。猛けき者とともに往くなかれ。彼らの様に倣いて、罌に落ちむ。」実に前途洋々たる若者、キリスト教教育のもて主に祈り、徳の道を歩み始めた若者が、いかに多く悪しき仲間と囲まれて、美德の規範を放棄し、花咲かすべき若芽を摘み取ることか。彼らの悪例、彼らの誘導や誘惑、さらには真面目な事柄や宗教的な事柄すべてに對する侮辱や嘲弄が、若者に毒となり、害を及ぼす。こうした感染から切に身を護り、生活と仕事に必要な以外は、いかがわしき働き手と交際してはならぬ。」①

こうした地震説教の多くが神の怒りを招くとして住民に改悛を促すのは、不信心や放埒などおおむね個人的なおける罪過である。他方『イザヤ書』でとくに伝えられる社会的な不正への制裁は、バーナードの説教でも語られるが、人間の傲慢として政治的な専横、経済的な非道、身分的な落差を大胆に指摘するは、ボストン・サウス教会の教役者トーマス・プリンスである。

① Barbard, Young Persons excited to seek the Lord in their Youth, a Sermon preached at Marblehead, October 8th. 1727.

pp.25-26. in Barnard, *op.cit.*

プリンスの説教『地震―神の御業にして聖なる怒りの顕示』その二

一、圧制、神の世界を超えたい欲望、安息日における労働、他者に対する欺瞞と強奪が、神を怒らせる罪過としてまず挙げられる。

貪欲がこうした強烈で危険な悪行の根源にほかならぬ。これらを列挙するのは、それぞれが畏怖すべき審判を下される対象だからである。『アモス』第八章四一―八で誌される。「貧しき人々を苦しめ、哀れな人々を踏みつける汝ら、これを聞くべし！」そこには無慈悲な圧制が支配する。「汝らは言う。新月が過ぎれば、穀物を売り、安息日に小麦を売ってやろう、と。」ここには神を超える世界への欲望と聖なる安息日における労働がともに見られる。「彼らは小麦の計量を小に、貨幣の計量を大に作為し、売買を欺瞞する」忌まわしい悪徳商法にして、さらに言う。「貧者を銀で買い取り、窮民を一足の靴と交換しよう。」困窮する人々への卑劣な強要であって、この罪が神を怒らせ、激しい脅威を招く。〔中略〕

二、傲慢も神を怒らせる罪過のひとつであって、厳しい劫罰を下される。

この種の悪徳としては、自己への過信、隣人に対する軽視と侮蔑、榮譽への野望、軽蔑、莊嚴な神に抗する自己礼讃が挙げられる。豪華すぎる衣服と建築と調度、豪華で贅沢な生活様式、他者への傲慢や侮蔑や敵意も同様であり、聖なる支配への蔑視と聖なる劫罰への憤懣もこれに加えられる。

神を激怒させ、厳しい災害で懲られる罪過は、大半福音書に誌されるが、とくに畏怖すべき筆致で表現されたものとして『イザヤ書』第二章以降を挙げるに止めよう。「万軍の主の日エホバはあらゆる傲慢な輩と尊大な輩に臨まれ、高ぶる彼らを低く屈められる。また、すべての高い山と丘、すべての高塔と城壁、すべての大型船や壮観に臨まれて、雄大なものはみな崩され、豪壮なものもみな破壊される。かくしてその日大地が震動し、神のみ讃えられる。」

こうした厳しい警告はユダ王ウジアの時代にも発せられた。さきにも述べたが、歴然と予言されたとおり、彼の治世に地震が勃発したのである。さまざまな時代に相継ぐ震動についても疑問の余地はなく、最後の決定的な地震が地球全体を壊滅させるに至るであろう。

これについては『イザヤ書』第十三章以下で一層明白に誌される。「視よ！主の日となり、公憤と激怒をもってこの国を荒地とされ、罪人を根絶される。さらに悪業のためはこの世を、不正のため悪人を劫罰する。また、偉ぶる者の傲慢を挫き、脅かす者の専横を阻む。それゆえ、万軍の主たる神の公憤をもって激しき怒りの日に、エホバは天を覆し、大地を揺れ動かす。かくして追われる鹿のごとく、さまよう羊のごとく、彼らは消散するであろう。」①

太平洋戦争の渦中から戦後の混乱期へかけて『聖書』に関する講話と著述を続けた矢内原忠雄は、社会的な不正や抑圧への批判が『イザヤ書』に含まれることを強調した。同書の解説として彼は、ユダ王国におけるウジヤ

王の治世について述べる。「ウジャ王は非常に偉い王様でありまして、四方を攻めまして非常に国が栄え、富国強兵となりましたが、外国の偶像崇拜や迷信が多く入り来たり、又国民道徳が墮落して、国民が神様を離れたのであります。」聖書研究の素人と断りつつも矢内原は、預言者イザヤがとくに支配階級の罪を重視したと説く。そこでは指導者階級が下層階級を搾取し、弱者貧者から掠奪して、孤児を大切にせず、寡婦の声を聞かない。「禍なるかな、彼らは家に家をたてつらね、田畑に田畑を増し加えて余地をあまさず、己ひとり国の中に住まんとす。『イザヤ書』第五章八。』」富者による土地併吞であります。禍なるかな、朝つとに起きて濃き酒をおひもとめ、夜のふくるまで止りて飲み、云々。同十一。』」酒宴享楽の生活であります。禍なるかな、彼らはいつわりを縄となして悪をひき、云々。同十八。』」政治家の虚偽であります。禍なるかな、彼らは悪をよびて善とし、善をよびて悪とし、云々。』」学者の詭弁であります。こうした国で「主戦政策を採る為には軍事費が多くかかりまして民衆に安息がない。民衆はその為に精神的にも経済的にも休息を奪われるのであります。疲れて居る国民に安息を与えよ、之が慰めだと神様がおっしゃるのに、汝等は之を聞かない。汝等は馬を走らそう、飛行機を飛ばせよう、やれ軍艦だとか何だとか言つて、神の言葉を聞かないから、走るには走るが敵に逐われて逃げ走るであろう。同書第三十章十六。之に反して汝等が政治的には非戦平和の政策を取り、精神的には平静頼の態度を取れば、それによりて汝等は救と力を得るのである、と之がイザヤの言でありました。」植民政策研究の専門家であり、帝国主義批判によって大学から追われる矢内原がこのように語るとき、その脳裡にはファシズム体制と侵略戦争に突入する一九三〇年代の日本があり、来たるべき未曾有の国難が臉に浮かんだと解さ

れる。①

〔未完〕

① 矢内原忠雄著『聖書講義Ⅳ イザヤ書 イザヤ書註解 イザヤ書講義』、岩波書店、一九七八年。

第四節 地震の自然的成因と自然学的考察

一九七八年ハーバードの著名な法学者ウィリアム・D・アンドリュースは、二五〇年前の地震説教を網羅的に検討し、つぎのように述べた。「総じて十八世紀初めのキリスト教教護者は、自然哲学を宗教の侍女とみなしつつ、新しい科学を啓示宗教の教理と適合させるよう努めた。」ここでは地震の衝撃や被害の模様とともに付随する異常な音響と臭気等についても報告される。「こうした自然現象に係わる記録が、科学的分析への深い関心を示すことは明らかであろう。あまた証言の収集と検討が、事例の集積に基づくベーコンの方法に合致し、ひいては理論的説明へと導くのである。」^①

こうした脈絡において一七二七年の地震説教のなかでとくに注目されるのは、ふたりの聖職者、ジョン・バーナードとベンジャミン・コルマンの論述である。博識多才なバーナードは、地震の成因として地中における物質の燃焼だけでなく、周囲に惹起する種々の変動をも指摘した。その説明は十一月二日マーブルヘッドでなされた説教の本文に含まれる。

バーナードの説教「神の統御し給う地震」 その三

^① Andrews, op.cit., p.285.

普通の意味における通常の地震、大地が自然に動き、揺れる現象について述べよう。この説教でそれを含むのは、私自身の理論を聞陳し、やや詳しく語りたいためからである。ここで扱う地震には、地球全体の絶えざる動き、地軸を中心に日々回転し、軌道に沿って年毎に運行する動きは含まれぬ。地球の若干の地域においてあちこちの地表が、異常に激しい動き、まるで悪寒に襲われた病人のごとき震えを示すのを拙論では意味する。あたかも海上を走る波濤のように、地表に漸進的な波動が発生する。同時に地中からの圧力で大地を押し上げ、ときにはそれを引き裂いて、大きな亀裂へ周囲を陥没させる。こうした通常の地震についての成因と結果を簡略に述べよう。

一、地震の成因には自然的なものと超自然的なものが考えられる。超自然的な成因は神の手であって、これについては後段で述べる。ここでは地震を惹起する自然的成因ないし二次的要素について検討したい。地球の内部にはあるいは広大な空間に渡り、あるいは数層にも重なって風や水を含む空間や空洞が存在すると推論できる。水を湛える小さな空洞は井戸を掘る際にも見出されよう。『創世記』第七章一、『箴言』第八章二八、『ヨブ記』第二二章四。

地中の火災が存在することは、世界各地における火山の噴火によっても例証される。

さて、こうした地中の火災が風や水に満たされた空洞に近づくと、必然的に強烈な作用をそこに与える。銃砲の火薬が点火添加されて外気に作用したり、竈の火が瓶の水を沸騰させるのにも似ている。熱に触発されて稀薄になった風と水は、激しく動き出し、出口と空間を求めて膨れ上がる。かくして空洞近くの堅い地盤が、拡散する風と水のため、空間を供すべく必然的に激動するのである。空洞から地表まで各地層が直結

するため、衝撃の方向、あるいは空洞凹面に対する最初の衝撃に従って、地表もまた必然的に動揺する。この衝撃がさらに激烈となり、地層に裂け目や亀裂が現れると、閉じ込められた風と水の圧力はやや弱くなる。① 自然的原因で起こる地震は以上のような脈絡で立派に推論できる。

また、ロンドン王立協会へ報告を寄せたコルマンは、すでに大地震発生の日後、ボストンにおいて自然科学的な考察を公にしていた。彼の説教集『キリストの御手による摂理の裁き、怖るべき地震で示される神の声、ならびに災厄に蝕まれた大地（四つの説教）』の序言ではつぎの洞見が提示される。

コルマンの説教『キリストの御手による摂理の裁き』

ベンジャミン・コルマン

ボストン、一七二七年十一月二日

序言

広汎にして慄然とする大地震をもって、崇高なる神が今次示された畏怖すべき摂理の裁き、大地の揺れを

① John Barnard, *Earthquakes under the Divine Government*, pp.77-79, in *Two Discourses addressed to Young Persons: To which is added a Sermon occasioned by the Earthquake which was October 29 1727*. Boston, 1727.

感じたあと、近くでも遠くでも地中の音響ないし噪音が同時に聞えたと言う。〔中略〕

大地の震動に驚き、地下の噪音を聞いたこのたび、なぜそれらが遠隔の地点でもほとんど同時に感知されたのか。

その原因は不明であるが、私の推測によれば地中深くに大きな空洞が存し、そこにおけるひとつの突風が衝撃が周囲の震動を惹起したのである。地中には膨大な硫黄性物質が蔵され、そこから雷鳴と雷光が空中へ発する。地上で大量の火薬に点火する光景に喩えてもよい。これが直径五百マイルの大地を揺がすであろう。今次の地震で震動した地域、当地の北端から遠く南方フィラデルファに至るまでは、その範囲に入る。敢えて言おう。このように蔵された膨大な硫黄性物質が突然に発火し、爆破により地中の広大な部分を引き裂く。だが、まず地下深くで発射を続け、上部に強い衝撃を与えて、前述のごとく周囲の地層を一気に隆起させ、同じ時刻に遍く震動を惹き起こす。ただし、そうした範囲の末端では当然揺れがより小さく、中心へ近づくにつれより大となる。突風によって震動とともに噪音も発生し、揺れを感じたところではどこでもそれが聞こえ、噪音の強弱も震動の大小に比例する。

以上がこの問題に対する私の率直で手短かな推論であるが、嬉しくもこれと同じ見解が見出される。マーブルヘッドからのそうした書簡に意を強くして、震動は広く同時に発生し、その方向は下から上へであって、地表に沿うのではない、と結論しよう。事物の本性からしてこうした見解が明らかに正しい。なぜなら、どの地点でも震動と噪音がほぼ同時に発生し、その方向は下から上へであって、地表に沿わぬよう我らの五感も感じ、聞くからである。

したがって、震源から放射状の先端、たとえばフィラデルファで感じる震動と噪音は微弱である。また、

放射状をなす距離に比例して、いかなる深さで震動が発生したかをも推論できよう。震動の強さとともに燃焼し噴出する物質の膨大な量についても同様である。それほどの規模と程度の震動は、燃焼せる烈風に起因すると、きわめて容易に説明できる。①

「バーナードの洞察とともにコルマンの論究は」とアンドリュースは歴史的に評価する。「地震理論の発展に多大の貢献を果たしたと考えられる。一七二七年の地震に際する波状運動の認識は、二五年後に現れる同じ植民地人、ハーバードのジョン・ウインスロップの理論に先立つものである。地震の特性として波動を最初に認識した功績は、ジョン・ミチェルの著述、一七六〇年『哲学紀要』収録の〈地震の成因と現象に関する推論〉にながらく帰せられてきたが、近年ウインスロップの論文、一七五五年刊行の『地震についての講義』にその栄誉が移された。しかし、ウインスロップやミチェルが理論を発表するかなり以前に、実際にはバーナードとコルマンが地震の波動に関する考察を公にしたのである。すくなくともバーナードとコルマンの場合には、一七二七年の地震を契機として植民地アメリカからきわめて新鮮で革新的な科学認識が発信されたと言える。」②

① Benjamin Colman, *The Judgments of Providence in the Hands of Christ*. Boston, 1727. pp. v-vii, *Evans Early American Imprint Collection*, online.

② Andrews, *op.cit.*, p.286.